

深夜の不毛帯開拓のパイオニア 『11PM』誕生秘話

元制作局チーフディレクター 横田 岳夫(NTV)



11PMの顔になった大橋巨泉、朝丘雪路のコンビ

みんぐるふらぶ
題字 中川順

東京オリンピックも無事終わり、世の中は経済成長へ走り出す頃だった。街には観音開きのクラウン、縦四つ目のセドリック、ヒルマン、オースティン、ルノーラルが走り、ワーゲンのビートル1200が憧れだつた。

一日はどんなに買い物が多くても24時間しか売れない。それを9時間も閉店するのは誠にもつたまない。最初は売れなくとも何とか売る努力をしようと考えたのが、民放最古の日本テレビではなかつただろうか。

昭和40年当時、夜11時に皆さんは何をしていただろうか?夕食後、風呂に入つてテレビを見る。その頃のテレビは、一部カラーケロで、朝8時前後から夜11時頃までのおよそ15時間放送で、そこには9時間あまりもの「深夜の不毛帯」が存在した。

何しろタクシーの初乗りが90円。国鉄(JRになつたのは昭和62年)の初乗りが10円。夜半に仕事を終えて何か食べようとしても、ごく限られた店しかなかつた時代である。

32年に入社して、希望通り音楽班（まだ課でも部でもない）に入

れて、音楽番組を週6本も抱えて

奮闘していた僕に、運動部長後藤

達彦（タツチャン）と、8年間師

と仰いできた音楽部井原高忠（タ

ーサマ）の二人から誘いを受けた

のは、40年4月のある日だった。

「月曜から金曜の帯で、1時間

のワイドを生でやる。月水金は日

本テレビ（N）、火木は大阪読売

テレビ（Y）で制作する。スタッ

フを社内から集めるので、芸能局

代表で参加しないか？但し、ワン

クールで消えるか、3年もつかわ

からないけど……」のこと。

折しもテレビの音楽番組が、視

聴率と予算に縛られて自分が作り

たいものが作れないことに限界を

感じていた僕は、この新発想に思

い切つて飛び込んだ。（これが21

年も続くとは夢にも思わず）「も

しつぶれたら、音楽番組に戻れば

いいさ」という甘えがあつたのは

事実だ。

深夜の不毛帯を少しでも商売に

しようというこの発想は、当然編

成部と営業部が議論を重ねた末

に、当時最も進歩的で、未来の番

組像を抱いていた実力派の、後藤

で、チャンス到来とばかりに、金

井原の両氏に白羽の矢が立つたの

だろう。

スタッフ、方向、出演者決定

スタートは11月8日と決まり、

早速スタッフの編成が始まった。

番組の基本コンセプトが「ニュ

ース主体ワイド版」とのこと

で、名目は報道局制作となつたが、

60分の生番組ならスタジオに慣れて

いる芸能局組に負担がかかるのは

目に見えていた。結局、報道2、

社教2、アナウンス1、映画部

1、ドラマ2、音楽2の混成部

隊が出来上がり、内容と出演者の

検討が始まつた。

番組名は分かりやすく『11P

M』でいいじやないかとの意見が

すんなり決まつた。

基本的な姿勢は、月曜は政治、社

会不タ。水曜は三面記事。金曜は

週末を控えてレジャー主体となつ

た。対象視聴者層は20代から50代

の男性とし、女性はあまり意識し

ていなかつた。

僕はかねてから密かに、雑誌で

いえば当時の『週刊平凡パンチ』

風の男向けの遊び番組を週末にや

りたいとの想いを持つていたの

で、チャンス到来とばかりに、金

曜を担当し毎週一人で作る旨願い

出た。これは「併せて月曜、水曜

の内容もアドバイスすること」の

条件付きながら、二人のプロデュ

ーサーにも正式に認められた。

一番困つたのは新しいタイプの

ワイドショウの司会者として、60

分を生でこなせる人探しだつた。

3カ月で消えるかもしれない番組

に既成の大物は使えない。結局、

ナリストの山崎英祐さん。アシス

タントには30名余のオーディショ

ンの結果、若くて可愛い高原良子

さん。ニュース解説に読売新聞の

小林庄一さんが決まつた。大阪は

藤本義一、安藤孝子、飯干晃一の

異色の組み合わせと決まり、また、

タイトルバックやCM前の5秒間

の差し替えQカットには、目の保



初代キャスター山崎英祐

新番組の骨組みが次第に固まってゆく中で、僕の心中には「金曜は自分に成算があるが、月曜と水曜は、今までニュース原稿を書いたり、短い教養番組を作っていたスタッフが、深夜に起きて見てもらえる番組を作れるのか」という不安が芽生えていた(家庭用のVTRはまだ普及していなかつた)。

こうした心配とは別に、編成部、海外取材を見越し日航と提携

養にとターサマお得意のファッショングの分野から、モデルクラブや公募の素人の大オーディションを行い、ジューン・アダムス以下7人のカヴァー・ガールを決め、バニーガール風の衣装も完成した。



大阪の司会・藤本義一、安藤孝子

営業部の新商品開発への期待は大きく、営業が将来の海外取材を見越していくいち早く日本航空とのパートナーをまとめてくれたのが、後々大いに役立つことになる。このパートナー契約は、毎日日航の30秒スポットを入れる替わりに、当時のノーマルエコノミー料金年間2

空とのパートナーをまとめてくれたのが、後々大いに役立つことになる。このパートナー契約は、毎日日航の30秒スポットを入れる替わりに、当時のノーマルエコノミー料金年間2000万円分の無記名ティケットを出すというものだつた。

これをNとYが3対2で分け、僕らは年間1200万円分を海外取材に使える訳。当時まだ海外旅行は一般的ではなく、これからの経済成長期に海外旅行への誘いを拡大したい日航と、我々の思惑が一致したのだろう。といつても、当時アメリカへの直行便はなく、ハワイで給油。ヨーロッパ線は、DC8-55という機種で、定員は130名だが、機体の前およそ3分の1を貨物室にしてるので、客室は約80席。そして、ソ連上空や、アラスカ経由の北回りがまだ無く、南回りが週3便だけ。東京からパリへ行くのに、台北、香港、バン



勢揃いしたカヴァー・ガール

ゴッタ煮の内容でスタート
さて、てんやわんやの検討の末、その日のニュース、最近の話題の裏話、ファッショントーク、映画紹介、5~6分のミニドラマ、徳川夢声さんの講談調『007』等が決まつてきた。

およそ異質なもののゴッタ煮に見えるが、ゴッタ煮の中に新しい見えたが、ゴッタ煮の中に新しい

コク、ニューデリー、テヘラン、カイロ、ローマと寄港して約29時間を要したと記憶している。

深夜番組の行くべき道を探るのが狙いだからこれでよいのだ。事実この後は、月水金が夫々の道筋を決めて発展してゆくことになる。僕はこの番組を、勤め人が仕事から帰宅して夕飯をとり、風呂上がりにパンツ一枚で寝転がつて、ビルでも飲みながら見たくなる、そんな内容をイメージしていた。

そして、遂にやつてきた40年11月8日月曜日。技術の指令塔のス

イッチャヤーが毎週音楽番組で呼吸ピッタリの野口博さんだつたのもラツキーだつたし、フロアにはこの種の番組では最重要ポストであるフロマネに僕と一緒に音楽部から参加していた百戦錬磨の仁科俊介君がいてくれたので、たいしたボロを出さずに終了。しかしエンディングが流れ、ON AIRのランプが消えると同時にドッと疲れが出た。

第一回を終わって痛切に感じたのは、この番組にはスタジオに慣れている芸能局組が、少なくともあと5、6名は必要との思いだった。

なお、『11PM』のテーマは、ターサマ一流の凝り性で、当時一流的音楽家、三保敬太郎氏に作曲し

てもらつたもの。当時、ジャズスキャットを歌えるプロのグループはなく、クラシックの東京混成合唱団の女性コーラスをリズムに乗つて歌わせるのに丸一日かかり、大変な苦労だつた。後に大ヒットとなるこのテーマは、「サバダサバダバサバダバ」であり、殆ど人がいう「サバザバサバサバ」は間違いなので、念の為。

大橋巨泉登場

一回目を終わつて、自分の番組ながらつまらないと感じた僕は、事前に見てくれるよう頼んでおい



巨泉と打ち合わせをする筆者

「巨泉なんでもコナーナー」を作つた。文字通りなんでも遊びネタを一つ取り上げ、その道の達人を招いて秘伝を聞くのだが、達人必ずしも話が得意とは限らずむしろ逆が多かつた。そこで「いつそのこと、巨泉が自分でやつちやえは」との僕の一言が、テレビタレント巨泉の第一歩となり、後に正司会者への登用が、一世を風靡した「野球は巨人、司会は巨泉」の名セリフにつながつてゆく。

『何でもコナーナー』の第一弾は、5番アイアンを持つた巨泉の悩みにプロがアドバイスをするなど、アマチュアゴルファー巨泉のトク。これがハンディ10~20台の共



月水司会の小島正雄と高原良子

感を呼んだらしく好評を博し、金曜イレブンの行くべき道がかすかに見えた気がした。このあとこの『何でもコーナー』は、麻雀、ボウリング、釣り等、後の金曜イレブンの核となる要素に拡がつてゆく。

番組継続へ大幅テコ入れ

走りだした『11PM』は、回を追つて月水金各曜日の色分けも徐々に固まりだし、駄目なものは切り捨て、新しいアイディアを考え

え、漸く番組らしくなってきた。僕は一人で金曜日の中身を考え、60分を埋めるのに必死だった。この改革時、最大の問題は、ますます複雑化するであろう60分の上、番組作りに不慣れな報道、教養組のために、月水の制作会議にも必ず参加していたので、めちゃくちゃ多忙だった。

そして番組内容が充実してくると、かなりのトチりも大目に見ていた素人司会陣の負担が大きくなり、より繁雑になる内容を捌き切れなくなってきた。

41年3月に入ると、営業的にメドが立つたとのことで4月以降も続行が決まり、制作スタッフも司会陣も刷新が不可欠になつた。大阪の二人は、素人ながら関西人独特の飾り抜きのキャラが受けたようで、続投となつたが、東京の3人は求めるものが酷だつたようで、3月一杯で降板していただいた。スタッフも半分以上を入れ替えて、芸能局から、その時点で番組を持つていないが、作る能力がある人を何人か引き抜いた。

同時に番組は報道局制作から芸能局制作に変わり、出向の形だった芸能組が本隊となり、更に充実した番組作りが始まった。僕はこの大改革が『11PM』の本当のス

タートだと感じていた。

この改革時、最大の問題は、ますます複雑化するであろう60分の生番組をソツなく捌ける後任司会者の人選だった。スタッフ間で議論を重ねた上で、結論は、当時、音楽評論家で、コンサートの司会もこなす小島正雄氏だった。出演要請への返事は「おおいに興味があるのに引き受けるが、週三日はきついので月曜、水曜だけなら」とのことでの、楽に即決となつた。

大橋巨泉で「金曜イレブン」

残るは僕が担当する金曜日を誰にするかだ。金曜の今後の内容に小島氏は合わないと思つていたが、「じゃあ誰?」となるとこれと思う人がいない。但し僕の意中では、金曜のすべてを託すのは最終的に大橋巨泉しかいないと想ひが大きかつた。彼は初期の『何でもコーナー』で様々な分野をこなし、これを買われて月曜水曜にいが今で言うレポーターの原形みたいなものを無難にこなしていた。

何よりも僕が買ったのは、抜群の記憶力、雑学的知識の広さ、負けず嫌い、そしてしゃべりの流暢さだった。世の人は「巨泉はアド

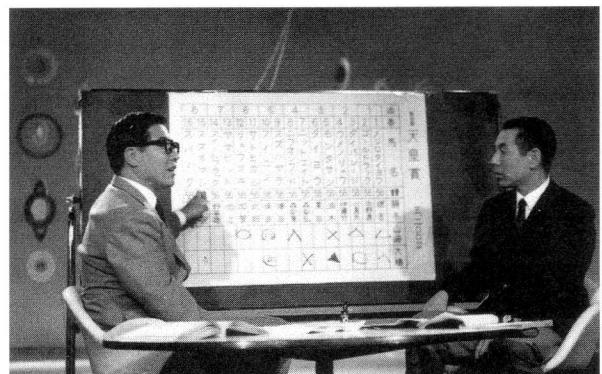
リブがうまい」というが、アドリブは強力な記憶力に基づくもので、普段「あ、これ面白いな」と思つたことを頭にインプットし、適材適所でそれを取り出すのであって、彼はこの点で非常に優れていた。

しかし、制作会議で「大橋巨泉を金曜の司会」という僕の提案は、予想通り各方面から猛烈な反対を受けた。曰く「軽薄だ。生意気。実績がない。ルックスが」等々とても通りそうもなかつた。

僕は社内の個人々々の説得に転じて、「将来の金曜日をこなせる才能は巨泉以外になし」を旗印に説いて廻り、特に局長クラスには「首を賭けてでも起用したいので、暫く見守ってほしい」と訴えた。結果、強引に押し切った形で「巨泉の金曜」が決まつた。

後に巨泉が才能を發揮して金曜の顔になり、他局でもレギュラーを持つようになると、「巨泉は俺が起用を薦めた」と称する人が続出して困つた。その殆どは猛反対した人達だった。ざまあみろだ!

「金曜イレブン」が視聴率面、スポーツCMの売れ行き面で大発展したのは、巨泉の才能もさること



天皇賞予想の競馬コーナー

を贈るとともに感謝したい。

また、僕は巨泉と金曜の将来を徹底的に議論した、その結果、今までテレビが取り上げなかつた雀、競馬、ゴルフ、釣り等のスポーツ&ギャンブルも深夜なら許されるという点で一致した。僕はこれに近い内容を、スタッフ当時は月曜でやつていたが、内容的に週末を控えた金曜の方がよからうとなり、僕自身も週3回のディレクティングが、金曜1本に集中出来ることになり、益々テンションが上がつていつた。

営業面も成功、番組軌道に

この頃は高度経済成長の初期だつたし、やがて週休2日制の普及も追い風となつて『11PM』は各曜日とも順調に力をつけていつた。

営業面でも売れ行きは加速度的に上昇し、後には15秒のスポーツを入れるのに2~6ヶ月待ちなんていう時代もやつてくる(このキャラと思つていた。この勘は的中し、巨泉の突込みと朝丘さんの金曜イレブンの礎が確立した。

それまでの美人歌手美人女優の殻を破つて、新しいキャラに挑戦42年10月からはカラーフ番組にな

り、順調に軌道に乗つた『11PM』

だつたが、43年の新年早々に大事
件が起ころ。

何と月曜水曜のホスト振りが好
評だつた小島正雄さんが、54歳の
若さで急逝されたのだ。巨泉が大
奮闘して穴を埋め、ひと月後には
水曜のホストが三木鮎郎さんにな
り、月曜は巨泉が金曜路線以外に
も意欲を示したので、政治、社会
ネタでやることになった。

金曜は内容の充実とともにロケ
取材が多くなつたが、初期はネッ
ト局が少ないこともあって番組の
知名度が低く、「じゅういちぴい
えむつて何やの?」などと言われ
てガックリしたものだつた。しかし
42年後半位からは、空港などで
見知らぬ人から握手を求められる
ようになつた。

またネット局が増えるにつれ、
スポーツ番組であるが故にスポン
サーの制約を受けず、各業界の有
力メイカーやとのタイアップも自由
だったので、内容の充実に大いに
役立つた。

この頃、大阪は藤本、安藤コン
ビが好調だつたし、東京の月曜、
水曜も新しく加わつた、制作意欲
にあふれた若いディレクターが競

い合つて、夫々の曜日の路線を確
立していく。

ただ僕らスタッフを悩ませたの
は、放送終了後の視聴者からの電
話だつた。好意的な意見30%、文
句が70%だらうか。時間が時間がだ
けに大半は酒気帯びで、際どい内
容の日はスタッフが手分けしても
対応が終わるのが午前2時、3時
も珍しくなかつた。世の中どんな
物でも反対意見はあるから「一々氣
にしなかつたが、あくまで『はい
はいごもつとも』で早く会話を終
わらせるのが皆上手になつた。

ちなみに、放送時間だが、番組
名の割には、11時開始の期間は2
年弱と意外に短く、11時15分から
12時20分の65分間の期間がもつと
も長かつた。

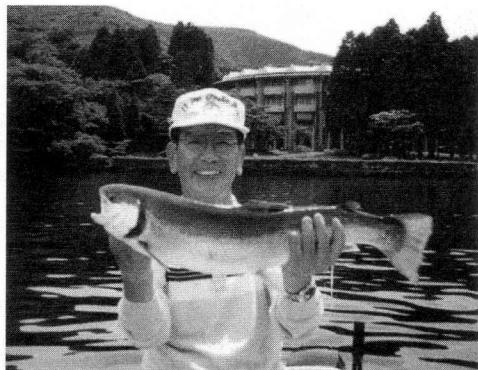
青春を捧げた番組

こうして40年前の開始当時を振
り返ると、僕自身が30歳から50歳
までの21年間、自分の分身の如く
番組を愛し、作り続け、自分の青
春を捧げた『11PM』への愛着が
改めて甦つて来る。

40年11月8日から60年9月28
日の最終回まで21年間、スタッフと
して一週も欠かさず在籍したのは

僕一人だけである。

そしてこのロングランを成し遂
げたのは、常にアイデアを提供
してくれ、僕の意向を信じて一緒に
に走つてくれた大橋巨泉のおかげ
と、ここで改めて感謝したい。
僕にとっての『11PM』は、デ
ィレクターとして全ての情熱と信
念を注ぎ込んだ番組であり、「11P
Mの前に11PMなく、11PMの後
に11PMなし」の想いと感謝を當
時の仲間たちに捧げ、皆へのレク
イエムとしたい。



箱根芦ノ湖での筆者近影